

大阪教育集会 2022

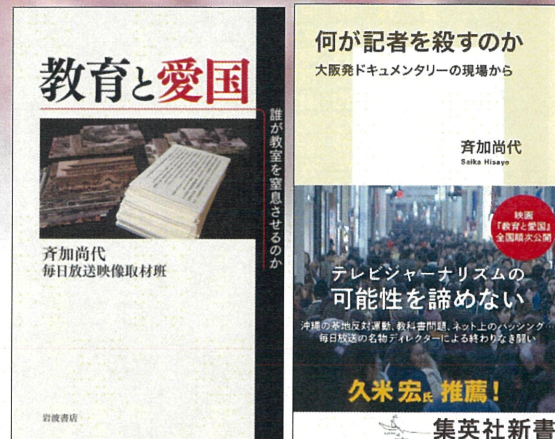
# 映画『教育と愛国』に込めた思い

さいかひさよ

お話: **齊加尚代さん** (毎日放送ディレクター／映画『教育と愛国』監督)



プロフィール：1987年毎日放送入社。報道記者などを経て2015年からドキュメンタリー担当ディレクター。企画、担当した番組は数々の賞を受賞。『映像'17 教育と愛国～教科書でいま何が起きているのか』（2017年7月）で第55回ギャラクシー賞テレビ部門大賞、第38回「地方の時代」映像祭優秀賞。『映像'18 バッシング～その発信源の背後に何が』で第39回「地方の時代」映像祭優秀賞など。個人として「放送ウーマン賞2018」を受賞。著書に『教育と愛国～誰が教室を窒息させるのか』（岩波書店）、『何が記者を殺すのか 大阪発ドキュメンタリーの現場から』（集英社新書）。



日時：2022年7月23日(土)13:30～15:30(予定) (オンライン)

参加費：700円 (学生・障がい者無料)

**参加申し込み** 次の(1)と(2)の両方ともお手続きください。

(1) 氏名、メールアドレスを明記して、メールで連絡する。

送信先のアドレス：[osaka-chikyo@syuppan.net](mailto:osaka-chikyo@syuppan.net)

(2) 参加費を郵便払込取扱票にて振込む。(住所・氏名・電話番号を明記)

振替口座番号：00960-7-148374

加入者名：子どもと教科書大阪ネット (末尾には21はつきません)

※参加費の振り込み確認ができた方に、当日の視聴のURLをご連絡します。

※当日はZoomを視聴できる環境をご自身でご準備ください。

主催：子どもと教科書大阪ネット21

(集会の主旨にご賛同いただける方であればどなたでも参加できます。)

問合せ：出版労連大阪地協 [osaka-chikyo@syuppan.net](mailto:osaka-chikyo@syuppan.net) (担当:永石)



齊加監督の「映画に込めた願い」を裏面に掲載

2022年2月24日、ウクライナにロシア政府軍が侵攻した。

無辜の民が犠牲になる侵略戦争を世界が目撃した日、映画『教育と愛国』の公開決定という記事がヤフーニュースに流れた。5年前のテレビ番組に追加取材を重ねて完成した映画の情報解禁日に戦争が始まる。想像を絶する衝撃だった。そして、この偶然には深い意味があると感じた。

本作には、第二次世界大戦の被害と加害を記述する歴史教科書が何度も登場する。南京事件や日本軍の慰安婦問題、そして沖縄戦の集団自決。こうした戦争加害の記述をめぐり、右派勢力から攻撃されて倒産した教科書会社がある。その元編集者は「教科書に戦争加害の問題を書かないで、被害の歴史だけを載せるのでは戦争学習にならない」と訴える。

「世界の平和に貢献するという理想の実現は、教育の力にまつべきものである」(要約)と旧教育基本法は謳った。しかし、2000年代以降、教科書の記述が政治の力で変えられていく。消されてゆく戦争加害の記述。教科書は誰のためにあるのか。本作の大きなテーマである。

10年前、大阪で開催された「教育再生民間タウンミーティングin大阪」(2012年2月26日)に安倍晋三元総理が登場した。「教育に」政治家がタッチしてはいけないものかって、そんなことはないですよ。当たり前じゃないですか」と強調した。松井一郎大阪府知事も参加したこのシンポジウムは当時、MBSニュースで「安倍元総理は教育基本条例案に賛同」との見出しで短く放送されたにすぎなかった。別の記者が取材した素材を5年前に「発掘」しテレビ版『教育と愛国』に採用したのだが、いま振り返れば、地元大阪で行われたこのシンポジウムが政治主導で教育行政へ影響力を及ぼす、いわば出発点であったと思う。教育基本条例案は、その後修正されて大阪府議会を通過。維新の会は「教育再生」の先陣を切る役割を果たしていく。

2006年、改正教育基本法に愛国心条項を盛り込んだ翌年に安倍氏は退陣、その後下野していたが、大阪のこのシンポジウムで活力を取り戻し、第二次政権へ復活の推進力を得たという。私自身は、この少し前、アメリカの公教育が疲弊する現状をルポ、大阪維新の教育改革は同じ轍を踏むと批判的に報じるニュース特集を2日連続で放送していた。この報道に対し、Twitterの連打で猛烈に非難してきたのが当時大阪市長だった橋下徹氏である。

10年経過したいま、まさか自身で映画を製作することになるなんて、予想だにできなかった。映画制作を目指すテレビディレクターも少なくないが、私はそんな大志を持ち合わせていない記者だった。ところが、政治の流れが意識を変えていったと思う。『教育と愛国』の映画化の話が持ち上がった時も「いや、無理無理」と当初は消極的だった。ところが、新型コロナウイルス禍で公教育の現場がさらに疲弊し、2020年10月、日本学術会議の新会員任命拒否の問題が勃発した時は人生最大のギアが入った。映画の企画書を提出しても社内

の協力者は少なく、ときに孤独に苛まれる日々だったと正直に吐露したい。

さらに取材の壁も厚かった。教科書をめぐる攻防を丁寧に描こうと考えたが、「圧力」そのものをカメラに収めることはできない。眼前で命令が下されればよいが、そうはいかない。「忖度」という言葉を教科書編集者は繰り返し使う。教科書検定制度が圧力と忖度の舞台であることが伺えた。

自己規制や自己検閲は、健全な民主主義と相いれない。教科書調査官だった人物や教科書編集者らにインタビューを試みるも拒まれ続けた。取材を受けることが「中立性を疑われる」と釈明する人もいた。

森友学園理事長の籠池泰典氏に自分が取材したのは、実に19年ぶりだ。傘下の塚本幼稚園の運動会で園児が軍歌を大合唱したと手紙が届いたことからその取材は始まった。幼稚園から少し離れた道路上で保護者に次々と声をかけ、「裏取り」していた時、「ビニール傘をさした男性が近づいてきて、「なんで勝手に話を聞くんや」とその傘を振り下ろして叩かれた。これが籠池氏とのファーストコンタクトである。私は忘れられない。

だが、籠池氏はこの出逢いをすっかり忘れていた。今回の取材時に当時の記憶を尋ねるとMBSニュース特集の内容しか覚えていないという。そして現在の籠池氏は、歴史教育の被害者に見えた。「自虐史観」を糾弾する運動に関わった彼に歴史教科書の問題点を聞いてみた。「いまや安倍史観になり、人権が後退している」、その答えには驚いた。さらに取材が終ると拙著『教育と愛国』(岩波書店)に私のサインを求めてきた。和解の証と思って丁寧にサインした。

「教育再生」の掛け声のもと変化の波がやってきて、教育や学問の自由が攻撃される現場を見てきた記者として職責を感じていた。「慰安婦」を取り上げる授業の様子が地方紙に掲載されたのを引き金にバッシングされた平井美津子教諭や科研究の研究内容をめぐって「反日学者」と中傷された大阪大学の牟田和恵教授。彼女たちに向かう攻撃は凄まじかった。「反日」という排斥の波が増幅していくリアルをずっと取材してきた私は、平井さんの授業をTwitterで非難する吉村洋文大阪市長(当時)や国会とSNSで槍玉にあげる杉田水脈衆院議員の政治的手法を観察してきた。政治的攻撃や恫喝が日常になる社会は自己規制を強め、ますます重苦しい圧力を増してゆく。教科書の書き換えが政治圧力の象徴のように。

私たちは時代の曲がり角を曲がったのか。民を踏みにする政治が、まかり通るのはなぜなのか。権力や強者に擦り寄る空気はメディア内部にも漂っている。在阪テレビは維新の政治家との距離が近すぎると問題視されていてMBSも例外ではない。教育に対する政治の急接近に危険性を感じ、切羽詰まる思いで映画を作った。本作にカタルシスも正解もない。あるのは、語り出してほしいという願いだけだ。